

# 1950年代における益田勝実古典教育論

井浪真吾  
(2018年10月4日受理)

The Study of Katsumi Masuda's Classical Literature Education Theory in 1950s

Shingo Inami

**Abstract:** In this paper, I picked up Katsumi Masuda's statement about classical literature education. Through these statements, I point out something as below. (1) Masuda considered classical education as classical literature education. (2) Masuda considered classical education as human formation. (3) Masuda has students read the way of view and thinking of the author's thing from the classical literature. (4) Masuda has students read the activity of the characters from the classical literature. (5) The background of Masuda's idea was the cultural movement of the 1950s.

Key words: Katsumi Masuda, Classical literature education theory, 1950s

キーワード：益田勝実、古典文学教育論、1950年代

## 1. 研究の目的

益田勝実の古典教育論はこれまで幾度となく検討されてきた。その中で、国語教育に関する「益田勝実の仕事」については、1961年前後を一つの画期とする見方が定着している。例えば、須貝千里(2007)は、「(稿者注：益田勝実)氏の国語教育の仕事を考えていく際に、五〇年代と六〇年代の間に看過し得ない、見えるものを問題とする歴史社会的方法から見えないものを問題とする歴史社会的立場へという断層・飛躍がある」(p.71)と述べている。また、内藤一志(1996)は、「益田氏の古典教育に関する発言は、昭和四〇年代を境にして、「現実(状況)と対決する」ものから、「ことばを通して考える」ものへと変わる」(p.54)と、益田の古典教育論を整理している。

1961年という年は、自身の国語教師としての仕事を反省する「国語教師・わが主体」や、それと対をなす

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：竹村信治(主任指導教員)、山元隆春、  
佐藤大志

「一つの試み—十年目の報告—」を益田が発表した年である。益田勝実(1961)は「わたしの最大の倒錯は、自分の教育活動のほとんど大半を生徒たちの学校生活全般のあり方についての探索にふりむけてしまい、国語教師としての努力を二の次にしてきたことです」(p.119)と述べており、それまでの国語教師としての自身のあり方を否定しているかのようである。また、「わたしはわたしなりにですが、ようやく国語教育のなかみを具体的な新しい体系として、考えはじめています」(p.129)とも述べており、国語教育に対する自身の考えを新たにしようとする決意が見られる。

このように国語教育に関する「益田勝実の仕事」が整理されるようになった結果、特に50年代の益田の古典教育に関する発言には目が向けられなくなった。50年代における益田の国語教育論を検討したものは幾つか見られるが、同時期における益田の古典教育論に焦点を当てて検討しているものは僅かに内藤一志(1993)が挙げられるくらいである。抑も50年代においては、「古典教育」を冠した益田の論考などがあまり見られない。しかし、他の論考や活動報告などを視野に入れることで、50年代における古典教育や古典文学に対する益田の考えを窺うことができる。

内藤一志 (2015) は、「指導内容としては益田勝実  
に代表される学習者の認識形成に深く関与させよう  
とする指導観に基づいた授業を理想として求めなが  
らも、「古典文法の知識の徹底と現代語訳をゴールと  
する入試対応型の授業にとどまる」ことを古典教育の「戦  
後変わらぬ大きな課題」(p.137) とする。この課題が  
克服されない要因として内藤は大学入試という現実的  
な教育制度を挙げているが、以前に内藤一志 (1993)  
自身が述べた「抽象的な言葉で語られる益田の古典教  
育論は、具体的な形で把握することが必要なのでは  
ないか」(p.32) という、益田古典教育論を検討する際  
の課題が克服されていないことも挙げられるのでは  
ないだろうか。そこで本稿では、目を向けられることが  
少なかった、50年代における益田の古典教育に関する  
発言や文学研究に関する論考、益田の活動などに注目  
することで、益田の古典教育論をできるだけ「具体的  
な形で把握」することを目的とする。そして「戦後変  
わらぬ大きな課題」を克服するための一助とした。

## 2. 益田勝実と文化運動

幸田国広 (2006) によれば、1946年5月に中国の戦  
地から復員してきた益田は、1948年に東京大学文学部  
国文学科に入学する。入学後、益田は、「日本文学史  
研究会」を主宰し、ガリ版刷りの機関誌『日本文学史  
研究』を発行し、文学研究の道を歩む。この時期の益  
田が自身の成果を発表する主たる場として選んだのが  
日本文学協会であった。

1946年6月に、藤村作と西尾実が中心となって設立  
された日本文学協会は、前田雅之 (2007) が「戦後の  
正統思想であった左翼 (民主主義は左翼が代表してい  
た。これも日本の変容ともいえるか) の立場を守りつ  
つ」、「反体制であることに存在意義を見出してきた感  
のある」(p.46) と述べるように、左派的な色合いが  
強かった。また、小熊英二 (2002) によれば、1950年  
1月、いわゆる「コミンフォルム批判」の影響により、  
「共産党主流派の影響下にあった文化団体は「民族文化  
」の賞賛を開始し、「茶の湯・生け花・大仏などが「民族  
文化」として賞賛され」、「それと同時に、民話や民  
謡の再評価が唱えられ」、「文学でも、『万葉集』の「人  
民的」な性格や、近松門左衛門の「民衆性」などが再  
評価」(p.281-282) されていた。そして50年代には、  
竹内好と伊藤整との往復書簡を発端として、様々な立  
場の人を巻きこんで交わされた国民文学論争や、「民  
衆志向とナショナルイズムの同居」、「学問成果の民衆へ  
の還元」、「成果そのものよりもサークル参加者の人間  
的成長のほうを重視すべき」(p.340) という考えを共

有した国民的歴史学運動、1955年に「爆発的に普及し  
た」(鳥羽耕史 (2010), p.32) 生活記録運動など、「生  
活を記録し、詩を創り、ガリ版文化を創出することによ  
って、たえまなく自分たち自身と自分たちの世界を  
再創造しようとしていた」「集団的な文化運動」(佐藤  
泉 (2005), p.21) があった。日本文学協会も文化運  
動の前衛として、「一九五二年度の日本文学協会大会  
では、近松門左衛門の民衆性や、『平家物語』の英雄  
叙事詩としての性格など」を討議したり、「日本文学  
協会と関係が深かった雑誌『文学』も、一九五二年九  
月号では民謡について、同年一月月号では民話劇につ  
いて企画を組んだ」(小熊 (2002), p.375) りしている。

こうした左派の雰囲気漂う日本文学協会に入会後、  
益田は精力的に論考を発表したり、活動や実践を報告  
したりしている。例えば、益田勝実 (1953b) は文学  
研究について次のように述べている。

民衆のもっていた文芸、民謡や語りや民話の発掘  
によって、埋もれた民衆の文芸の歴史がはっきり  
浮かび上がって来る必要があるとともに、支配階  
級が占有していた文字に綴られる文芸の中からも、  
次第に多くの民衆とつながろうとするものが  
出て来たことをはっきりさせる必要もあるわけ  
です。そして、それよりもっと以前にも、民衆とは  
断絶していた支配階級の文芸の中にも、社会の矛  
盾とどう取り組みそれを克服しようとした作品が  
あったか、そうしたことをすべてはっきりさせて  
おく必要があると思います。(p.37)

ここから「民衆志向」、「民族文化」の賞賛」に邁進  
する益田の姿を見て取ることは難くない。

「集団的な文化運動」に参入する益田が発表するも  
のの中で特に注目したいのが、文化サークルに関する  
発言や自身が主催していたサークルの活動報告であ  
る。益田は自身が勤務していた東京都立神代高等学  
校の卒業生を中心として、1952年に「サークル・いし  
ずえ」を主宰する。サークル・いしずえ (1955) によ  
れば、「民衆がみずから集まって学ぶことを始め」、「真  
に全国的なひろがり発展的創造的内容をそなえた学問・  
芸術を作り上げて行こうとする」(p.52) 日本文学協  
会や民主主義科学者協会などの運動に賛同し、活動  
を始めた文化サークルであったようである。

益田は別にサークル活動をしていた人物と情報交換  
もしており、サークルについての考えを深める。益田  
勝実 (1953a) は、サークルの存在意義を「この社会  
の中では学校も果たし得ていない、真の学校の役割  
りを荷うものという点」(p.2) に認めており、その役割  
については、「現実の社会と文化を掘り下げて見て行  
って、その欠陥を補う新しい社会と新しい文化を呼び寄

せようとする実践的な人間が創り出される場」(p.2)と述べている。これは、益田が教育の果たすべき役割を「実践的な人間」を創り出すことと考えていたこと、そしてこのような益田の教育観の背景にはサークル活動があったことを示唆してくれる。

では、どのようなことを「実践的な人間」を創り出すこととして考えていたのであろうか。益田がサークルメンバーとともに「サークル・いしずえ」名義で発表しているものからこれを窺ってみたい。

例えば、農民の生活を描いた『洪水』や『風に立つ人』の書評を「北多摩サークル・いしずえ」名義で発表している。サークル・いしずえ(1954a)の中で、益田自身は、『洪水』、『風に立つ人』のそれぞれの書き手である岡部政裕や樋口寛の「民衆の中に出て、民衆と共に働く姿に感銘を受け、テキスト自体には「ここに地道で力強い国民文学形成への一路線がはっきり打ち出されている」(p.61)と高い評価を示している。

そして、『洪水』の中の「梅雨の頃」という一編が取り上げられる。「梅雨の頃」には、農事研究会で知り合った富二とれい子が、恋愛関係になるものの、山村生活の制約から親に反対され、憂鬱な日々を過ごす様子が描かれる。これについて、サークルメンバーの野口平一は、次のように述べる。

がっちり骨組みされた百姓の重苦しい生活と昔のままの農法。その中で矛盾を取り除き明るい生活を営みたい気持ちは必ずあるものです。それが研究会やサークルとなって表れたと思います。富二もれい子もただ悩むだけでは進歩しません。二人の廻りには高山・飯島君や会員が大勢います。心で応援するだけでなく、もっと自分たちの悩みを取り上げ、研究会やサークルで話し合うべきです。(中略:稿者)「若い衆はだめだ」といわれても、青年たちには結びつけば力があります。その力の前には貧乏も、二男三男問題も、<sup>(マ)</sup>恋愛の問題も何時までも相変わらずではおれません。(p.60-61)

登場人物の抱えている問題を、自身も含めた現在の民衆が直面している問題として取り上げ、それに対する自分なりの応答をしようとする野口の姿がここに見える。

書評の他にも、実際の活動の様子を報告したのも見られる。例えば、サークル・いしずえ(1954b)では小説『生きる』に対する感想交流の様子を報告している。そこには、貧しい入院患者である「うた子」の苦境に共感したり、現在の庶民が直面する問題を発見してそれに対する自分なりの考えを提出したり、『生きる』に対する違和感を表明したり、『生きる』の語り方を批評したりするなどの様々な意見の交流が見ら

れる。その中でも、次のような感想の交流には目を留めておきたい。

「あの一、わたし今まで外の古典といわれるような作品をよんで、かきたいと思ったことはなかったけど、『生きる』をよんだら、かきたいなと思っちゃった。今『家』というのを書きはじめたんだけど。とても問題になるものじゃないけど、とにかくそんな気になったのははじめて」(中略:稿者)「ぼくはこう思うんだけどなあ。今まで本当に苦しんで働いているものの歴史はなかったんだ。少なくとも苦しんでいる本人が書き残しはしなかったら。それをうた子さんがやったんだ。民衆がね、自分たちの文学の主題を発見したんだって。これ以上の文学の主題はなかったはずなんだ。われわれの苦しみは山のように多かったけど、それを自分から芸術でうけとめようとはしなかったんじゃないかなあ」(p.26)

この交流からは、「民衆志向」もさることながら、サークル内では、問題を発見しそれに対する自分なりの答えを書きつけたものとして文学テキストを捉えていること、文学を参考にしながら、現在の自身を取り巻く問題を発見し、それについて自分なりの応答を書きつけていたことが窺える。

以上、益田の文化サークルに対する発言や益田が主宰した「サークル・いしずえ」の報告などに注目してきた。サークルメンバーは、書き手が自身を取り巻く問題を発見し、問題に対して自分なりの応答を書きつけたものとして文学テキストを見ていた。そして、サークルメンバーはこうした文学テキストを読み、書き手の発見した問題やそれに対する応答、登場人物が抱える問題とそれへの応答などに対して、読み手なりの応答をする。そしてこれだけに留まらず、他のメンバーと対話し、更に応答を繰り返していく。読んでは書き、書いては読み、自身を含めた民衆が抱える問題を発見し、それに対して自分なりの応答をしていく主体が、益田の言う「実践的な人間」だったのである。

### 3. 益田勝実の文学教育論

益田は「真の学校の役割り」を「実践的な人間」の創出と考えていた。そして、「実践的な人間」の内実を文化サークルの活動報告から窺ってみると、それは自身を含めた民衆が抱える問題を発見し、それに対して自分なりの応答をしていく主体であった。これを国語教室でどのように創出しようとしていたのかを以下で探ってみたい。

益田の根底には文化サークルでの経験の他に、教育

基本法があった。益田勝実（1955b）では次のように述べられている。

「われらは、さきに、日本国憲法を確定し、民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人類の福祉に貢献しようとする決意を示した。この理想の実現は、根本において教育の力にまつべきものである。」教育基本法はこう日本の教育の基本的方向を明示して、わたしたちの教育がめざすべき人間像についても、「われらは、個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成を期するとともに、普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造をめざす教育を普及徹底しなければならない。」という部分の前半で、はっきりと指摘しています。（中略：稿者）憲法が一つ一つの判例に貫かれねばならないように、基本法の明文が国語教育の端端にまで貫かれねばならない。そう考えます。（p.92-93）

益田が目指す「実践的な人間」とは教育基本法に記されている「真理と平和を希求する人間」でもあったことがわかる。

そこで、益田が目指したのが「文学教育」である。

益田（1955b）は文学教育について次のように述べている。

国語教育の基底をなす言語教育が、真理と平和を希求する人間の教育という目的に貫かれる時、それは人間を自由にし、個性的にします。束縛されない人間性のもち主にかえていきます。だが、それは言語教育だけでは完成できない。言語教育の実践面としての学校生活と結びつき、文学教育と不可分に一体化することで、力強いものになります。言語教育がすぐれた文学遺産を生き生きとした言葉の手本としてもつ時、話さずにはおれない、書かずにはおれない、心の中のを表現していく仕事を重視する時、すでに文学教育と言語教育はわかちがたく結びついているのです。人間性を解放する二つの大きな力、言語と文学のこの関係が、国語教育の大切なかなめではないでしょうか。（p.107-108）

「真理と平和を希求する人間の教育」を目標とし、「すぐれた文学遺産」を「生き生きとした言葉の手本」とした時、文学教育と言語教育とは「不可分に一体化し」、「人間性を解放する」ために不可欠であるという。また、「人間性の解放」とは、「人間関係の愛情に富んだ深まり、民主主義的な深い考え方、豊かな感じとり方、自由な創造的表現、総じて人間らしい生き方をめざす」（p.108）すことだと述べられている。

そして、益田の国語教育論の原点とも言える益田勝

実（1953c）は、「文学」や「文学教育」について次のように述べている。

第一に文学が遊びでないこと、人間の現実との真剣な対決に外ならず、そして個人の創造行為も単なる個人の行為でないこと、従って文学とは文学のみのことではないことが明白にされねばなりません。生徒達が文学から生き方を学びとり、豊かな心的生活の素材を摂取すると同時に、生徒達が文学を武器として現実との対決にたち向かうようなものであるべきであります。どこまでも歴史的な現実としての生が（古典であれ現代文学であれ）ふまえられた上で、理解も鑑賞も進められるべきでありまして、よりどころの第一は現実そのものと考えます。従って文学の問題としてのみあつかうことなく、人間の問題としてもあつかい、文学と生活を分離しすぎない点に留意したいと思いません。（p.24-25）

益田によれば、文学テキストとは人間が現実と向き合い、葛藤したり対決したり克服したりするその過程や様相を示したものである。これは先に見たサークルメンバーにも共有されていた文学テキスト観である。そして益田は、文学テキストから「生き方を学びとり、豊かな心的生活の素材を摂取」し、「生徒達が文学を武器として現実との対決にたち向か」えるようすることを文学教育の目標として定めていたことが窺える。また、ある座談会では「文学を教えることは、ただ文学を理解させるのではなくて、社会の変革をさせることでなければいけない」（益田勝実他（1953）、p.4.）と発言している。益田は文学を通じて、生徒自身が「現実との対決」をし、「社会の変革」を成し遂げられるように育てようとしていたのである。

また、益田は文学テキストの読み方として、書き手の立場に立って読むことを求める。具体的には益田（1955b）の中で次のように言及されている。

文学と現実との関係、文学における人間のしあわせをもとめるたたかいは若い世代の人が認識することは、文学教育の第一の要点で、その点は単に観念的には把握できない。文学を生みつけて来たわたしたちの祖先と同じ創造的主体の側に立つことによってでなくては、真の認識はできない、認識らしいものはできても、現実を生きぬく人間であるための体ごめの認識ではあり得ない、ここに大切な問題があると思います。同じ創造的主体の立場に立つということは、高級な文学作品を書こうとするところみをもつことではなく、自分の現実の生活をみつめて、そこに書かずにはおれないようなものを感じ、それにつき動かされて

書き、書くことによって、書くこと、創り出すことの意味の一端にふれるということです。この自分自身の素朴で真実な経験が、すぐれた文学遺産にぶつかることにより、限られた狭い範囲の人間であった自分自身の世界を、驚くばかりおしひろげてくれます。そしていかに真実に、いかに豊かに、自由に、創造的に生きるべきかを学ぶのです。(p.111-112)

文学テキストの書き手が、どのような時代状況の中で、現実の生活の何を問題として、どのように応答しようとしているのかを把握する。そして、生徒はそれと同じ地平に立って「体ごめの認識」をし、「つき動かされて書き」、「狭い範囲の人間であった自分自身の世界」を「おしひろげる」。益田が文化サークル活動をする中で育んでいた文学テキスト観や教育観が、ここにおいて文学教育という形で結晶化する。

加えて、益田(1955b)は「作者の伝記」や「他の作品のあらすじ」、「評論家の言葉」で文学テキストを語るような「研究主義の作品の読み方」(以上、p.114)ではなく、「すごい。にくらしい。かなしい。わくわくするほどうれしい。そういう自分の印象を捨象せず、それを出発点とし、それを深めたり検討したりする。すぐに出来るだけ自分の身にひきつけてよんでいく」という「誰でもするよみ方」を深めた「国民大衆すべてに通じる作品のよみ方」(p.123)を求める。「誰でもするよみ方」を深めることについては、次のように述べている。

すごいとか、うれしいとか、そういう感じに、揺り動かされながら、身につまされたり、自分の生活につきつけて考えたりしながらよむよみ方を、どこで高度なものにしていくか。そのことがはっきりしなければ、今までわたしののべたこと全体無意味なものになります、その点どうしたらよいのか。もちろん高度とは学問的粉飾をこらすということではなく、作品をよんだことによって、自分が人間的に一步前進し得るということです。その手がかりはやはり形象にあると思います。形象を重んじて、それを通じて深く入りこんでいく、という平凡にみえる道ですが。(p.124)

自分の感想に終始するのではなく、感想を出発点として、テキストの形象をしっかりと読み込むことで、「作品を貫くものの姿をはっきりと見定めること」(p.129)ができるようになり、「誰でもするよみ方」を「高度なもの」にしていくことができると言う。

更に益田は、次のように生徒自身にも注意を向けることを忘れない。

その場合忘れてはならない基本的なことがらとし

て、わたしたちも生徒も、感情と理智と意志の綜合体としての心を働かしており、理智なら理智だけで作品にぶつかってはいけないということだと思います。(中略：稿者)過去の情操教育としての文学教育でない、全人間的な感情と理智と意志とを分離しない文学教育こそわたしたちの立場です。感情と理智に加えて意志を見落とさないところに、鴻巣さんの報告の中にもあった、文学の「行為へのいざない」という性格を発揮させる教育の意味があります。(p.131-132)

文学テキストを読むことで生起する感情、形象に眼をこらすといった理智、何か行動を起こしたくなるといった意志。文学テキストと向き合わせる際、生徒に生起するこれらのどれをも見落とさないことが重要であると益田は述べるのである。

#### 4. 益田勝実の古典教育論

益田勝実(1954)は当時の古典教育の問題点として、大学受験を目的とした文法指導への固執、道徳的教訓的な指導、指導内容の表層性、教科書教材の不適合など、現代の古典教育においても指摘されていることを挙げている。そして、古典テキストも近現代文学テキストも同じ文学テキストであるのだから、古典教育においても、古典文学教育が為されなければならないと述べる。例えば1963年の高等学校学習指導要領改訂にむけての動きが見られるようになった時期に、改訂に伴う「現代国語」と「古典」の分離をめぐる座談会、益田勝実他(1960)が開かれる。その中で、益田は「古典教育というのは古典文学の教育そのものだ、と思うのです。この場合は、<sup>(77)</sup>理代国語の場合と違って、文学の教育だと思うのですよ、古典の教育は、言語生活に対する適応とか改善とか、そんなことでない、と思う」(p.70)と発言している。「古典文学教育」であるからには、「文学教育」と同様にテキストが読まれ、同様の目標が達成されなければならない。実際、古典教育の目標には、前に確認した文学教育と同様の目標が据えられている。

たとえば、「指導要領」が古典文学について、「古典と自分たちの生活とのつながりについて学ぶ」、「古典をとおして過去の時代と過去の人々の生活を理解する」、「古典に書かれた多くの価値ある、また美的な内容を知る」等々と指導の要領をかかげながら、古典文学を貫く「個人の尊厳」にめざめていき、「真理と平和を希求」して来た、古典の古典たることを学べ、と指導しないのはおかしいことです。(益田(1955b), p.94)

また、益田勝実他（1960）中で、益田は次のように発言している。

そこまであまりはっきりさせて、近代の文学における人間探究はわれわれに体で切実に続いてくるけれども、古典の場合はそう直接的にはいかない。いかないところにかえて特性があるというふうを設定していくと、かえて、なんかはじめからことが決まりすぎちゃうと思うのですね。教育として考えていくと、そうではないと思うのですね。やはり古典の文学の教育だけを問題にするからそうなるので、古典の文学の教育が問題になるまえに近代の文学との取っ組み合いがいま古典に時間をかけるよりもっと大きな比重でもって行われる必要があります。でなければ、古典はいらない。問題はそこから出てくる。だから、近代の文学と若者たちが教室のなかでどんなにぶつかるか、ということが前提にあって、そこで答えきれないもの、諸要求がもりもりしているのです。それが古典のなかでみごとに取っ組み合っているものもあるし逆に、古典の取っ組み合いはひ弱いといって投げ捨てたくなるものもある、ということで古典教育がはじまってくる。古典教育はそれ以外にない、と思います。（p.81）

「近代の文学の取っ組み合い」をし、近代文学テキストだけでは生徒の要求に応えられない時に初めて古典テキストが必要となると述べる。益田は現代の古典教育のように、「古典だからできること」、「古典だからすべきこと」というようには考えない。そのように考えることを、逆に「なんかはじめからことが決まりすぎちゃうと思う」と疑問視する。益田は決して古典不要論者ではないが、古典ありきの、古典テキストの範囲だけで思考する古典教育は要らないと述べる。益田にとっての古典教育は、近現代文学テキストを対象とする文学教育を補完する有効な手段だったのである。こうした益田の発言の背景には、文化サークルにおけるテキストの役割を考える中で育まれたと思しい。益田勝実（1953a）はM君に対しての書状という形式で次のように述べている。

古典をやるか、近代の作品をやるか、現代のものをやるかというような場合になった時、以前に現代の作品を相当やったことがない限り、現代優先という方向にもって行くように努力すべきだと思います。（中略：稿者）古典というものを、向こうから自然に何か与えてくれるものだろうと考えるのは非常によくないことだと思います。（中略：稿者）文学を採り上げる以上、第一に現代文学をとりあげ、文学にあらわれて来ている現代の社

会と文学自身の問題を、しっかりと把握していなければ、把握にいたらなくても把握したいという気魄をもっていなければ、古典の美名も何の役にもたちません。近代文学をやるということでも事情は同じでしょう。（中略：稿者）サークルで現在の社会についての問題がとりあげられて、その際、その問題と関連しているところの作品を研究しようという風になり、現代の文学を採り上げて、その後更にそれではもっと以前の文学も見に行きたい、そうすればいろいろと一層深いことがわかって、という風になって、はじめて古典が視野に入ってくるのではないのでしょうか。（中略：稿者）ぼくたちは今日の時点に生きているのですが、今日からの視点だけで自己の生き方を決する時、必ず狭い見解の、あやまりの多いものになります。人間の今日まで歩んで来た大きな歴史をふりかえり、その中に今日まで貫いているようなものを発見し、その発展延長として、自分を生かして行く必要があります。古代文学というものも、そんな立場からだけ、限りなく意味をもつものでしょう。（p.34）

益田が古典テキストよりも「近代の文学の取っ組み合い」に「大きな比重」をもたせようとしていたことの原因がここに語られている。益田は、生徒に近現代文学テキストを読ませることで、生徒が、自身を取り巻く社会、「その時代時代の文学が取り組まねばならなかった主要な対象、人間愛の問題、生と死の問題、支配・被支配の問題、戦争と平和の問題、女性解放の問題、「家」の問題等々」（益田勝実（1955a）、p.80）に対して認識を深められるようにしようと考えていたのである。また、現実に対して認識を深められていない状態で古典テキストを読んでも、「古典の美名も何の役にも」立たないと述べる。では、古典テキストを読むことの意義はないのかというとそうではない。近現代文学テキストだけを読んでいても、「人間愛の問題、生と死の問題、支配・被支配の問題、戦争と平和の問題、女性解放の問題、「家」の問題等々」に対してどう応答していけばよいのか、どう行動していけばよいのかに分からなくなる時がある。また、生徒が自身の生き方を考える際に、「今日からの視点だけ」では、「狭い見解」で、「あやまりの多い」考えに陥ってしまうと益田は考える。その時に古典テキストは何事かを示してくれ、生徒の見解を拡げ、生徒の生を豊かにしてくれるという。

では、具体的に益田は古典テキストの何をどのように生徒に読ませようとしていたのであろうか。ここではまず、中学生を対象とした『徒然草』の教材研究に

関する益田勝実(1959)に注目したい。

益田は『徒然草』の価値について次のように述べている。

『つれづれ草』の価値は、そのすぐれた批評精神にある。一見、王朝憧憬に満たされているようなこの作品は、内部に踏みこんでみると、新しい中世の眼で物事をじっと見つめているのである。作者が自己をつき離して見るばかりか、物事を一面的に見ず、同時に多角的・客観的に観察し、人間に対しても、それぞれの立場を認め、それぞれに位置づけることのできる性格を持っている。(p.201)

益田は作者の「すぐれた批評精神」、「自己をつき離して見るばかりか、物事を一面的に見ず、同時に多角的・客観的に観察し、人間に対しても、それぞれの立場を認め、それぞれに位置づけることのできる性格」といった兼好の思想や精神、ものの見方・考え方に価値を置いている。

また、益田は「指導の目標」を次のように据える。

中学における古典文学の学習のねらいは、年若い学習者たちが、古典文学をささえる作家たちの、文学を通じての人間探究のきびしさ、芸術創造の新鮮さ・美しさ・ゆたかさに気づき、自己の民族が育て上げてきた文学への関心と親しさを養うところにある。決して古典語の習練ではない。(p.195)

とすれば、中学生が『徒然草』を読む時、益田が中学生に目を向けさせたいのは、各章段に見られる兼好の批評精神や、ものの見方・考え方であるのは明らかであろう。

益田は各章段からどのような兼好の精神や、ものの見方・考え方を見出せるかを、幾つか章段を挙げて例示している。「仁和寺にある法師」(第52段)では、「権威や伝統に盲従する精神から発した、先達尊重主義ではない」、「物事を道理に合うように着実にやっていくための、経験的合理主義から出た先達尊重」といった兼好の「新しい中世的合理精神」を、「高名の木のほり」(第109段)では、「下衆の言からも、教訓を貪欲に発見する人生探究のはげしさ」といった兼好の「中世的なきびしい求道精神の一面」(p.185-186)を、それぞれ見出している。そしてこれらはそのまま生徒に気づかせようとしていたことである。

更にここで見逃せないのは、益田にとって兼好は、「新しい中世的精神の荷い手」(p.201)であったという点である。兼好は「貴族社会に身を置きながら、中世の新興支配階級や農民の世界から吹き込んでくるものの影響も受けて」、「日本ではじめて自由で強靱な批

評文学を樹立した」(p.201)と益田は述べる。自身の所属した貴族階級に留まることなく広く庶民階級にも耳目を向け、「物事を一面的に見ず、同時に多角的・客観的に観察」する兼好に、益田は社会変革を担う新たな時代の人間の姿を看取したのである。そして、国語教室においては、そのような兼好の姿に注目させ、生徒たちが現実と向き合い、社会変革を成し遂げたいけるようにと考えていたのである。

加えて益田は、「古典とよばれる作品は、つねに、その内容の示すすぐれた思想・精神や描かれた事件の価値によって、ささえられている。が、同時に、それはいつでも、作品の細部の形象のみごとさによっても、ささえられている」(p.193)とも述べている。形象は先に見た「誰でもするよみ方」を「国民大衆すべてに通じる作品のよみ方」へと変換していくためにも必要なことであったが、古典テキストにおいても形象に注目することの必要性を述べる。『徒然草』第52段では、「伝承された世間話としての形態を持ち」、「兼好は一度も自分の意見をさしはさまず、主観的な表現・描写も試みていない」点や、「冗長な画面描写や登場人物の心理の動きの内面描写を避けて、きわめて簡潔にことがらを浮き上らせる」点を、第109段は「兼好の自己見聞談」で、「会話語の描写、とくに敬語の用いられ方」などから、「その場のようすを、木のほりや、かれ自身のことばで、いきいきと描き取っていく」(p.187-192)点をそれぞれ例として挙げている。

50年代の益田には、『徒然草』の他に『平家物語』『橋合戦』の教材研究に関する報告をした益田勝実(1956)も見られる。そこでは、「但馬や、それよりまたはるかに強い明秀は、こうした矛盾をはらんで、反平家連合の先頭に立っている。それは本質においては、新しい階級の代表者たちなのである。負け戦の中にあっても屈することも知らなければ、疲れも知らないかれらの姿」を「躍動的な描写」、「語りものの句調」による「リアルな力を発揮する民衆の形象力の特徴」、を用いて語り、「数詞」によって事実の外貌を「適確に伝え」、「語りのひきし」め、「擬声語の自在な使い方、息をのむよう」(p.169-174)に出来事が語られている点に教材価値を見出す。つまり、出来事の語られ方もさることながら、「躍動的な描写」による「新しい階級」に属する登場人物の生き生きとした姿に生徒の目を向けさせようとしていたのである。

これらの益田の教材研究に関する発言をまとめれば、古典テキストにおいて、「みごと」な描写にささえられた、新しい階級に属したり、新しい時代を切り拓いたりする書き手や登場人物の思想や精神、ものの見方や考え方、躍動する姿などを読むことを通じて、

現実と向き合い、社会変革や新たな社会創造を担う人間の育成を目指していたことが分かる。益田の言う「作者」や「登場人物」は「機能としての作者」(M・フォーコー (1969))や「記号」としての「作中人物」(小森陽一 (1991))ではない。益田にとっての「作者」や「登場人物」は、様々な葛藤や矛盾と向き合いながら、ある時代の中で生き抜いた生身の人間であり、「描写」はその様子を伝える作者や伝承者の声そのものだったのである。

こうした益田のテキストの読み方の背景には、当然のことながら益田の文学研究がある。この時期の益田は、「歴史社会的方法」という文学研究の立場に拠っていたと後に振り返っている。「歴史社会的方法」とは、益田勝実 (1966)によれば、「歴史と社会への強い関心を重んじ、文学を孤立したものと捉えない立場」で、「日本の社会、日本の歴史と遊離させないで日本の文学を捉える際に、人民大衆を基本にして捉えようとする」という特徴をもっており、テキスト分析の方法としては「多様に模索、試行され」(p.33-34)ていた。この立場に立って研究を行っていた「歴史社会学派」として益田が挙げているのは、永積安明や西郷信綱など日本文学協会に属し、精力的に活動していた人物である。益田勝実 (1967)は当時の自身を次のように反省している。

歴史的社会的<sup>(マ)</sup>研究方でわたしが捉えようとしたものは、なまの歴史性・なまの社会性ではなかったろうか。(中略：稿者)わたしがなまの歴史性・社会性といっていますのは、いまずらずら並べましたなかでは、〈社会的事実の中にもぐりこんでいる歴史性・社会性〉とほぼ同じなのですが、わたしの歴史的社会的<sup>(マ)</sup>研究法というのは、それをもっぱら相手どろろとするような狭隘さがあり、それがわたしの対象を見る眼をせばめてもいたように思います。(p.17. 傍点ママ)

このように当時の益田の興味関心の所在は、テキストに記された「なまの歴史性・なまの社会性」の中に描かれる「なまの」人間であったと考えられる。益田にとって、テキストに記された登場人物の言動や作者の思想、精神は、そのままその時代に生きる人間の言動や思想、精神であり、それをこそ生徒にも読ませようとしていたのである。

## 5. おわりに

以上、益田の古典教育に関わる発言を見てきた。益田の教育観、文学観、古典観などの背景には、文化サークルでの活動や思索、文学研究があったことが確認で

きた。そして、それらの経験をもとに古典教育を構想していた。その構想していた古典教育とは、真理と平和を希求し、「人間関係の愛情に富んだ深まり、民主主義的な深い考え方、豊かな感じとり方、自由な創造的表現、総じて人間らしい生き方」をしながら、自身を取り巻く現実と対決し、社会の変革を目指す生徒を育てることを目標としていた。そして、その目標を達成するために、ある時代状況の中で、書き手が自身を取り巻く現実から、「人間愛の問題、生と死の問題、支配・被支配の問題、戦争と平和の問題、女性解放の問題、「家」の問題等々」の問題を発見し、その問題に対して自分なりの応答を書きつけた、人間探究の過程が記された古典テキストと生徒を向き合わせる。そして、書き手の発見した問題やそれに対する応答、登場人物が抱える問題とそれへの応答などに対して、生徒なりの応答をできるようにする。そしてこれに留まらず、他の生徒や教師と対話し、更に応答を繰り返していき、認識を深められるようにする。読んで書き、書いては読み、自身を含めた民衆が抱える問題を見出し、それに対して自分なりの応答をできるようにするのである。その過程の中で、生徒は書き手と同じ地平に立って体ごめの認識をし、狭い範囲の人間であった自分自身の世界をおしひろげることを狙う。

但し、そうした読みは「研究主義の作品の読み方」ではない。自分にひきつけた読みを出発点として、形象を手がかりに高度なものとなる「国民大衆すべてに通じる作品のよみ方」である。その時に生徒が感情と理智、意志の総合体であるということを忘れてはいけない。加えて、近現代文学テキストの読みなどを通じて、現実に対して認識を深めてからでないと、古典テキストを読んでも意味がない。現実に対する認識を深めた上で古典テキストを読ませることで、今日からの視点だけの狭い見解を拡げ、生徒の生を豊かにしていこうとするのである。

如上が本稿が明らかにしてきた50年代における益田の古典教育構想であるが、最後に益田と関係の深い日本文学協会とその周辺について見ておきたい。

日本文学協会が発行している『日本文学』には、益田と同様の読みを示すものが見られる。藤原正義 (1955) がそうで、第109段について「ここでは、兼好が十四世紀の初葉においてその貴族的立場と身分意識にもかかわらず、「下腐」の言動の中にさへ普遍的真実を見出し、その意味で旧い拘束をこえて自由に見かつ考え感動していることをはっきり掴まえさせ、そしてそれが何故兼好に可能であったかに生徒の意識を向けさせておかなければならない」(p.27)と述べており、益田との接点を見出すことができる。目指すところも

「平和と民主主義・民族の独立と自由、の達成にあること、そうした達成を主体的に担っていける人間の形成にあること」(p.24)とあり、益田の目指すところと同様である。しかし、これをめぐる討論について報告された宮本正義他(1955)を見てみると、

東京の益田氏が討論の最後で発言された事「生徒から感想を求めると言う形でなしに、生徒と共に話し合い、考え合い乍ら読んでいく」と言うやり方、これは藤原氏が古典を(徒然草を)文学として読ませるという事を先ず目的とした方法と比較すると、やや異った古典教育の意味と方法を持っておられる様に思える。(p.30)

とあって、益田と藤原との間に異なりを見ている。そして次のように続ける。

益田氏の言われる方法が、現在の制約多い現場で、どの程度まで可能なかが問題になって来ると思う。(中略：稿者)例え「徒然草」の学習から、十分な現実認識の深まりと問題意識の喚起がなされなくとも、「徒然草」を、「文学として読ませる事」の意義が否定されてよいものだろうか。徒然草の中には、簡潔で優れた表現も随所に見られると思うが、そういう面はどうなるのだろうか……。(p.31)

討論の具体的な様子まで記されていないので、推測するしかないのであるが、藤原(1955)からは見えない、文学テキスト観、文学テキスト教材観の異なりが益田と藤原、宮本らとの間にあったのであろう。

また、小野牧夫(1954)によれば、「小野氏の考え方は、古典も現実認識、近代文学も現実認識であって、古典教育の独自の意義がなくなるのではないか。古典には、民族の魂の自抒伝という民族遺産としての意義があるし、また現代には失われているもので、しかも永遠の形象がある。それを教えなければならぬのではないか」(p.57)との発言が見られ、他の古典テキスト観と益田の古典テキスト観の異なりを見取ることができる。

また、益田は日本文学協会に所属し、文化運動にコミットする中で、自身の教育観や文学観を育てていた。この文化運動は前述したように左派的な色合いをもつ運動であったのだが、当時の左翼的知識人と公共性との関係について、権安理(2018)は、小熊(2002)を踏まえながら次のように述べている。

小熊が分析する市民運動は、公害を契機とした住民・市民運動ではない。公共事業への反対運動とは時期も異なり、彼の関心もそこにはない。だが、当時の左翼的知識人のエートスが、〈国民的なるもの〉と矛盾しないのみならず、むしろそれを積

極的に求めていたという点は注目すべきである。国家に対峙する、あるいは国家の政策に批判的な左翼的知識人も、実はナショナリズムを否定してはいなかった。しかし、それは国家が考えるものとは相違する。(中略：稿者)意味転換した新しい公共性は、国家のそれとは相違するような〈国民的なるもの〉を表象する機能を有してもいた。その端緒は、個別的な地域の私的な利害に基づく運動ではある。だがそれが、国民全体が問題とすべき普遍的なテーマへと昇華されることで、ある意味で国民統合の象徴となる。(p.169)

権によれば、当時の左翼的知識人は国家とは異なる〈国民的なるもの〉を求めており、彼らが市民運動や住民運動を牽引していった(p.166)結果、市民運動や住民運動が公共性を担うようになったという。ここでいう国家とは異なる〈国民的なるもの〉とは、小熊(2002)によれば〈民主〉だったのであろう。これを敷衍すれば、「民衆志向」や「民族文化」の賞賛を特徴とする文化運動とは、民衆を対象とした公共性を担う主体構築のための運動で、そして、これにコミットしていた益田の言う「実践的な人間」の創出とは、公共性を担う主体構築の謂いだったと捉えられないだろうか。そういえば、益田が現実の問題として挙げていた「人間愛の問題、生と死の問題、支配・被支配の問題、戦争と平和の問題、女性解放の問題、「家」の問題等々」は公共性において考えられるべき問題であった。50年代の益田が目指した古典教育は、国家とは異なる公共性構築に資する人間の育成を目指した古典教育だったのである。

## 【参考引用文献】

- 小熊英二(2002)『〈民主〉と〈愛国〉一戦後日本のナショナリズムと公共性一』新曜社。
- 小野牧夫(1954)「古典の教育—徒然草をめぐって—」『日本文学』第3巻第12号、p.56-57。
- 幸田国広(2006)「益田勝実 略年譜」幸田国広編『益田勝実の仕事5 国語教育論集成』筑摩書房、p.590-591。
- 小森陽一(1991)「主人公」石原千秋他『読むための理論—文学・思想・批評』(世織書房、1991)、p.42-45。
- 権安理(2018)『公共的なるもの—アーレントと戦後日本』作品社。
- サークル・いしずえ(1954a)「書評 農文協の『洪水』と『風に立つ人』」『日本文学』第3巻第7号、p.60-62。
- サークル・いしずえ(1954b)「『生きる』をめぐって」『日本文学』第3巻第10号、p.20-27。

- サークル・いしずえ (1955) 「北多摩につたわる写し絵」『日本文学』第4巻第2号, p.52-58.
- 佐藤泉 (2005) 『戦後批評のメタヒストリー—近代を記憶する場』岩波書店.
- 須貝千里 (2007) 「一寸待って」と呼びかけて……—益田勝実の仕事—『日本文学』第56巻第1号, p.70-76.
- 鳥羽耕治 (2010) 『1950年代—「記録」の時代』河出書房新社.
- 内藤一志 (1993) 「益田勝実の古典教育論についての検討」『語学文学』第31号, p.31-40.
- 内藤一志 (1996) 「読む 益田勝実氏の古典教育論再読」『日本文学』第45巻第6号, p.54-58.
- 内藤一志 (2015) 「古典」高木まさき他編『国語科重要用語事典』明治図書, p.137.
- 藤原正義 (1955) 「古典教育—徒然草を中心として—」『日本文学』第4巻第2号, p.23-30.
- 前田雅之 (2007) 「人文学総崩壊の時代と日文協」『日本文学』第56巻第4号, p.46-49.
- 益田勝実 (1953a) 「サークルの古代文学研究」『日本文学』第2巻第2号, p.1-9.
- 益田勝実 (1953b) 「源氏物語のいのち」『日本文学』第2巻第4号, p.36-41.
- 益田勝実 (1953c) 「文学教育の問題点」幸田国広編『益田勝実の仕事5 国語教育論集成』(筑摩書房, 2006年), p.11-35. 初出は日本文学協会編『日本文学の伝統と創造』(岩波書店, 1953年5月)
- 益田勝実 (1954) 「古典教育の反省」『文学』第22巻第7号, p.58-60.
- 益田勝実 (1955a) 「幸福な生活を築く働き手となるために—高等学校の場合—」幸田国広編『益田勝実の仕事5 国語教育論集成』(筑摩書房, 2006年), p.58-87. 初出は岩波書店編『岩波講座文学の創造と鑑賞5 文学の学習と教育』(岩波書店, 1955年3月)
- 益田勝実 (1955b) 「しあわせをつくり出す国語教育について」幸田国広編『益田勝実の仕事5 国語教育論集成』(筑摩書房, 2006年), p.88-142. 初出は、『日本文学』第4巻第7・8号 (1955年7月・8月)
- 益田勝実 (1956) 「平家物語・橋合戦—高校国語(乙)教材の研究—」幸田国広編『益田勝実の仕事5 国語教育論集成』(筑摩書房, 2006年), p.163-183. 初出は『日本文学』第5巻第7号 (1956年7月)
- 益田勝実 (1959) 「徒然草—中学三年の教材研究—」幸田国広編『益田勝実の仕事5 国語教育論集成』(筑摩書房, 2006年), p.184-201. 初出は, 倉沢栄吉他編『国語教材研究講座5 文学的教材と説明文の教材(中学校)』(朝倉書店, 1959年10月)
- 益田勝実 (1961) 「一つの試み—十年目の報告—」『日本文学』第10巻第7号, p.119-129.
- 益田勝実 (1966) 「歴史社会学的研究」『解釈と鑑賞』第31巻第10号, p.33-39.
- 益田勝実 (1967) 「歴史社会的方法から歴史社会的立場へ」『日本文学』第16巻第10号, p.14-19.
- 益田勝実他 (1953) 「座談会 文学教育をめぐる—その課題と方法—」『日本文学』第2巻第7号, p.1-14.
- 益田勝実他 (1960) 「座談会 古典教育について—高等学校学習指導要領改訂草案を中心に—」『文学』第28巻第8号, p.58-84.
- 宮本正義他 (1955) 「関西大会 報告と感想 古典教育—徒然草を中心として—」『日本文学』第4巻第1号, p.30-31.
- M・フーコー / 根本美作子訳 (1969) 「作者とは何か」小林康夫他編『フーコー・コレクション2 文学・侵犯』(筑摩書房, 2006年), p.371-437. 初出は『フランス哲学協会会報』第63巻第3号 (1969年7月)

※引用文中の歴史的仮名遣いは現代仮名遣いに、漢字の旧字体は新字体に直した